

季刊

湘南自然誌

Vol.27

園児と自然に触れ合う中から生まれた **四季のコラム**

園児や地域の皆さんからの投稿写真を季節毎に掲載

湘南発 **みんなでつくる！生きもの図鑑**

ひらおかようちえん
地域の自然の中で遊んで学ぶ **アクションレポート**

県立愛川ふれあいの村
吉田文雄学芸員によるコラム **心が育つ幼児教育**

遊んで学ぶ生きもののこと **知育ゲーム**

特集 “リアルな自然と生態”
を体感できる！

観音崎自然博物館

公立とはひと味違った活動を展開する観音崎自然博物館。
いったいどんな博物館なのか？
学芸員にお話を伺いに行ってきた。

2022 秋 自然はみんなのワンダーランド! 四季のコラム

ほった よしのすけ
堀田 佳之介 ●平岡幼稚園 園長

2022 年秋に、平岡幼稚園の園だよりに掲載
されたコラムを一部改変してお届けします。

昔はいなかった アオマツムシ



アオマツムシ♂

今年の秋も、園内ではコオロギやキリギリスの仲間賑やかな声を聴くことができました。その中で、最も目立ったのが「アオマツムシ」です。姿はマツムシに似ていますが、名前の通り体は緑色で、木の上で生活をしています。

とある日の夜、自宅近くを散歩していた時のことです。街路樹や庭木のあちこちから「リーリーリー」と鳴くアオマツムシの音が聞こえてきました。店舗の生垣でも鳴いています。声のする方をそっと覗き込むと、羽を震わせて鳴くオスがいきました。近くにはメスの姿もありました。オスの鳴き声に誘われてやって来たのかもしれませんが。

実はこのアオマツムシ、中国大陸原産の外来種で、初発見されたのは1898年東京の赤坂です。その後、温暖な地域を中心に分布を広げ、湘南地域でも樹木があればたいいの場所で見られます。皆さんの家の近くでも、鳴き声が聞こえるはずですよ。ぜひ気にしてみてください。探す時間は、日没後がおすすめです。

みんなで飼育している どんぐりむし

“どんぐりむし”とは、ドングリの中から出てくるシギゾウムシの仲間の幼虫です。親（成虫）は、ゾウの鼻のような長い口を持ちます。園内でも、拾ったドングリを置いておくとよく出てくるので、園児たちにも馴染み深い生きものです。ただし、親（成虫）にはなかなか会えることができません。そこで、親の姿を見るために、昨秋から“どんぐりむし”の飼育にチャレンジしています。

あれから約1年。夏が終わり、秋になっても、一向に姿が確認できません。飼育に失敗したのかと思ったのですが、ゾウムシの専門家の野津裕さんによると「（幼虫は土に潜って蛹になり）1年でてくる個体もいれば、2年かけて出てくる個体もある」とのこと。ということで、このまま2年目に突入することになりました。今年の成果が出なかったのは残念ですが、1cm程の小さな虫でも、親になるまでに長い時間がかかることへの驚きを感じてくれば・・・と思っています。



1. 成虫がいないかチェックをする園児 2. 飼育箱づくり
3. どんぐりむし（シギゾウムシ類の幼虫）

観察してみよう モズのはやにえ

園内の紅葉もピークが終わり、冬枯れの姿になりつつあります。徐々に冬の寒さを感じる季節となりました。そろそろ、「モズのはやにえ」の観察適期です。

モズのはやにえとは、モズという鳥が餌を枝などに刺したもののことです。「はやにえ」にされる生きものは実に多様です。私が昨年見つけたのは、カマキリ、イナゴ、コオロギ、ケラ、カメムシ、イモムシ、毛虫、ハチ、ミミズ、トカゲ、ゴキブリです。過去にはサワガニ、ドジョウも見たことがありますし、時にはネズミや小鳥が串刺しにされることもあるようです。

なぜモズは、「はやにえ」を作るのでしょうか。最近の研究で「オスがうまく歌うためのもの」であることがわかってきました。うまく歌うことができるオスは、メスにモテるのです。そのため、オスは繁殖期（2月～）に向けて、しっかり栄養がとれるように「はやにえ」を作り貯めているというのです。

2021年12月に、NHK Eテレ「なりきり!おーにゃん生きもの学園」のモズ特集回の取材協力をした際、12月中旬～下旬のロケハンで「はやにえ」を20個見つけておいたのですが、1月のロケ当日まで残っていたのはカバーを被せておいた3個のみでした。残りの17個はすべてオスが消費してしまったようです。

「はやにえ」は、河川の土手や公園など皆さんの身近な場所でも見られます。どんな生きものが串刺しになっているのか、どんなタイミングでオスが食べるのか、ぜひ観察してみてください。



1. モズ 2. ツヤアオカメムシ 3. イナゴの仲間 4. サワガニ 5. ドジョウ
※4・5は平岡幼稚園内で撮影したものです

“リアルな自然と生態”を体感できる！

観音崎自然博物館

案内してくれた人



佐野 真吾 Sano Shingo

● 学芸員

専門はゲンゴロウやタガメなどの水生甲虫類・水生半翅類。水生昆虫を追いかけて日本全国、アジア、オセアニア、ミクロネシアなどを旅している。



ネズミザメ目 ミツクリザメ
学名: *Mitsukurina owstoni*
英名: Goblin shark (悪魔魚)
採集日: 1984.3.15
採集地: 域々島 南西11
採集船: 政通丸 (村田)
体重: 183kg
全長: 3130mm (吻長:)
性別: オス

観音崎自然博物館は、三浦半島最東部、県立観音崎公園の中にある博物館である。創立は1953年。公益社団法人として運営される民間の博物館で、公立とはひと味違った積極的な活動が行われているようだ。観音崎自然博物館とはどんな博物館なのか？かねてから交流のあった学芸員の佐野真吾さんにお話を伺いに行ってきた。

● 特色のある立地と展示

「当館は三浦半島の豊かな森と、東京湾では唯の岩礁海岸に囲まれています。そんな立地を活かし、周辺海域を含めた自然と文化を展示のテーマとしています。学芸員3名のうち2名は海洋生物が専門で、展示も海系のものが中心になりますが、私の専門である水生昆虫類等の紹介もしています。小さな博物館ですが、森・川・海の多様な自然が詰まった博物館となつていんですよ。」と佐野さん。博物館の目の前には東京湾が広がり、その先にははつかりと房総半島が見える。そして背後には照葉樹の森。ここへ来ると森と海両方の自然を感じることができる。

● 民間ならではの活動

「展示だけでなく観察会にも力を入れています。私はみんなでワイワイ活動するのが好きなので、楽しくて仕方がないですね。」この博物館では学芸員発案の企画がすぐに実現すること。そのあたり、民間ならではの自由な気風を感じる。

年間計画に目を通すと、ざっと数えて60を超える自然体験イベントが開催されている。さらにはなんとYouTubeチャンネルまであり、佐野さんが子どもたちと野山を駆け巡る動画がいくつもアップされている。こうしたこの博物館独自の活動にもスポットを当ててみたい。

ミツクリザメなどが展示される
深海生物コーナー

展示個体プロフィール

科 ミツクリザメ属 ミツクリザメ

mi Jordan, 1898

【のサメ】

km (水深:90m)

改男氏) ヒラメ刺し網漁

20mm 胴回り:1090mm)



ダイオウイカ (東京湾産)
世界最大のイカ



チョウチンアンコウ
(紀伊半島沖産・水揚げ三崎港)



ラブカ (東京湾産)
「生きた化石」とも呼ばれる



リュウグウノツカイ
(東京湾産)



《 上から
ムラサキハナギンチャク
ナンヨウツバメウオ
ミノカサゴ
カゴカキダイ



貴重な標本 生体展示の数々

観音崎自然博物館には、東京湾と相模湾の海洋生物が多数展示されている。展示の目玉を佐野さんに伺ってみた。

「やはりダイオウイカの展示が目玉になりますね。観音崎の沖には深い谷があるので、深海生物も多く生息しているんです。この世界最大のイカ、ダイオウイカの標本は、博物館近くの走水港沖で採集されたもので、2021年に閉館した油壺マリンパークより引き継いだとのこと。他にも、リュウグウノツカイやラブカなど、東京湾で見つかった奇妙な深海生物の標本が多数展示されている。また、体長3mのミツクリサメや巨大なタカアシガニなどの標本は、幕で仕切って暗い海底の様子を再現した「深海コーナー」に展示。決して広いとは言えない館内をうまく使って臨場感を演出している。

この博物館では、標本の他にも多数の生体の展示が行われていて、水族館に来たように感じられる。その中に、タコなのか貝なのかよく分からない生きものがある。それが佐野さんにたずねてみると、「それはタコブネと言つてタコの一種です。不思議な姿でしょう？ 生きた状態で見られることはめったにないんですよ。地元の漁師さんが発見したもので、今この博物館で一番の人気のものになっているようだ。本誌編集中の11月13日に死亡。今後は標本として展示される。」

隣の水槽では風船のような生きものがフワフワ漂っている。「これも人気ものです。ウミウシの仲間で、名前はハナデンシャ。激レアです。」かつてお祭りなどの際に運ばれた、造花などで装飾された「花電車」が名の由来だそう。野島(横浜市金沢区)の生物調査の際に見つかり、博物館に寄贈されたとのことだ。

このように地元の方が捕獲した珍生物が展示されることも多く、この博物館の見どころのひとつとなっている。



ハナデンシャ (東京湾産)



タコブネ (相模湾産)



アオイガイ (相模湾産)



ミツクリエナガチョウチンアンコウ
(紀伊半島沖産・水揚げ三崎港)

種すべて見つかりました。なので、千葉県側から飛来した可能性が高いと思われます。この成果は博物館の研究報告で発表されている。

他には、三浦半島産のミヤマクワガタやトンボ類が並ぶ。それらの中に、ひときわ大きなタガメが目についた。よく見るとカンボジア産となっている。それについて伺うと、「実は世界のゲンゴロウを探りたい！というのが私の夢なんです。それで、休暇を取つてまずはカンボジアへ調査に行き、集めた水生昆虫たちをここで展示しています。仕事と趣味の境があいまいになってしまふのが学芸員のつらいところですね(笑)」と佐野さん。つらいと言いながら嬉しそうであった。

植物の展示はボランティアの方々が近隣から採集してきたものが中心になっているそうで、日々のお世話もボランティアさんが担ってくれているらしい。自分が採集したものが展示される、手作り感のある博物館である。

また、ここには生きもののばかりでなく、土器や漁具などの展示コーナーも設けられている。その中に、歴代すべてのゴジラの模型が展示されていた。初代ゴジラ初上陸の場は芝浦であるが、劇中「観音崎北東15マイルの海中に、北西に向け移動中のゴジラを発見す！」というシーンがあることもあって、この地域では観音崎に初上陸したというイメージが根付いているようだ。

最寄りの京急浦賀駅の列車接近メロデーにも「ゴジラのテーマ」が採用されている。ゴジラを民俗資料として展示するあたり、この博物館の独自性を感じる。

見どころ満載 昆虫からゴジラまで

ネアカヨシヤンマ♀
(観音崎産)

- 1 三浦半島産のミヤマクワガタ
生態や分布がよく分かっていない
- 2 県内産を中心としたゲンゴロウ類
佐野さんの調査の成果
- 3 歴代ゴジラと観音崎で出土した土器
博物館周辺の植物の展示
花や実など季節のものが並ぶ

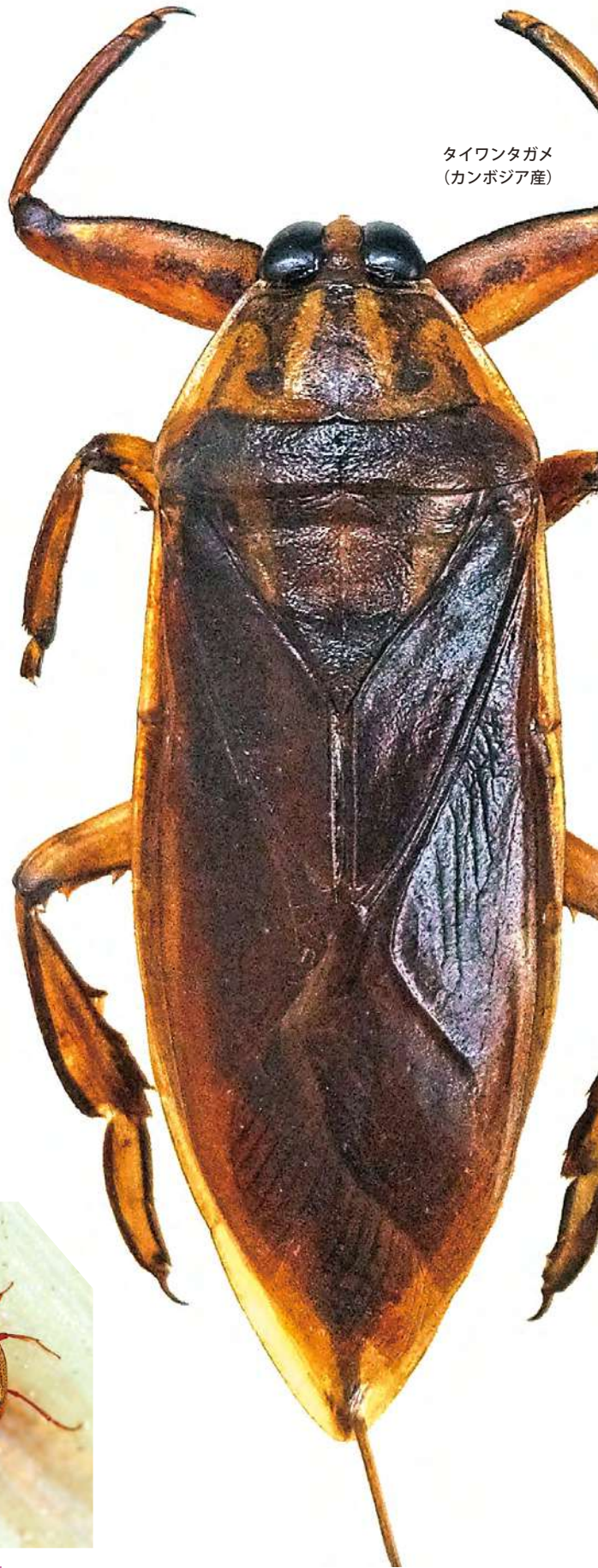


「県レッドデータ種の特ウキョウサンショウウオやアカハライモリ、国指定の天然記念物であるミヤコタナゴなど、絶滅寸前の生物の生きた姿を見ることができるとです。」と佐野さん。保護を目的とした繁殖も行っているそうだ。

昆虫類は、佐野さんの専門である水生昆虫を中心に、三浦半島で見られるものが展示されている。「昆虫類の見どころはこちら、神奈川県では絶滅したとみられていた水生昆虫カミヤコガシラミズムシですね。」他にも、絶滅が危惧されるネアカヨシヤンマなど希少な9種が並ぶ。これらは博物館周辺で佐野さんと中学生2人が発見したものだそう。多くが台風の直後に見つかったもので、もしかすると房総半島から東京湾を越えて飛ばされて来たのでは？と考えました。ここまで僅か7kmしかありませんからね。実際調査しに行ってみると、9

観音崎自然博物館では、陸や川の動植物の展示にも力を入れている。また、さまざまな民俗資料も収蔵されているとのことなので、併せてお話を伺った。

タイワンタガメ
(カンボジア産)



博物館が保全（保存）する生物の飼育展示
上／トウキョウサンショウウオ
中／ミヤコタナゴ 下／アカハライモリ

観音崎で見つかった
神奈川県で絶滅したとされる
カミヤコガシラミズムシ



ホンモノとの
出会いを
楽しもう。

- 1 アカテガニ観察会／夏の大潮の夜の神秘
- 2 ウミホタル観察会／幻想的な発光を観察
- 3 ヤンマとり大会／最速のヤンマを捕まえに行く
- 4 磯の観察会／海に潜って生きものを探す、
佐野さんイチオシの観察会
- 5,6 タッチプール／テラスでは海の生物に
触ることができる（写真はイトマキヒトデ）



SNS を駆使した活動

観音崎自然博物館は、YouTubeを利用して子どもたちの探検の様子などを配信している。サブチャンネルでは撮影の裏話などを公開。どの動画もエンターテインメント性が高く、子どもたちの生き生きとした表情が溢れている。また、動画内で活躍する佐野さんの姿には、学芸員のイメージを覆すものがある。

他にも、InstagramやTikTokまで一通り利用している。展示物についての記事も多く、予め見ておくと館内の展示もより楽しめる。

観音崎自然博物館では、展示や研究に留まらず、数多くの体験イベントが企画されている。その意図を伺った。

「当館のテーマは『リアルな自然と生態』。見て終わりではなく、体験活動に繋がりたいんです。そのため、一部の展示については、匂いを嗅いだり触ったり、感覚をフルに使って体感できるようにしています。特にテラスのタッチプールでは、生きたタコやウニ、ヒトデ、ナマコ、カニ、魚などに触れられます。早速佐野さんと共にテラスに出てタッチプールを体験してみよう。ふくらした可愛いヒトデが目についたので、手に取ってみると、確かにうねるように動いていることを肌で感じる事ができた。

「目の前が自然の博物館のようなものなので、観察会も積極的に開催しています。」番人気があるイベントはアカテガニの観察会で、夏の大潮の夜、陸に棲むアカテガニが海に子どもをまく光景は、大変神秘的だそう。「ウミホタルの観察会も人気ですね。自分で捕まえて手の上で光らせてみるところまでやりません。すぐその海に行つて潜ったり魚を捕ったりする磯の観察会も定番になっていておすすめです。」これらのイベントはネットでの申し込みが基本になっていて、地元の方より東京や横浜から参加する人の方が多いらしい。

「一般向けの観察会とは別に、後進の育成を目的とした、小中学生だけからなる『ジュニア生物調査隊』も結成されている。佐野さんが隊長を務め、三浦半島を中心とした淡水域の生きものの調査や保全活動を展開。隊の活動で得られた成果を、子どもたち自身が発表できるように、博物館で『ジュニア研究報告』という場を作りました。これがいい訓練になっているようで、外部の専門誌に自分で投稿するレベルにまで成長した子

仲間とっしょに！ 遊んで学べる はくぶつかん



取材の最後に佐野さんが語られていたのは「展示を見に来るだけでなく、生き物や人や情報と出会えて、次の活動に繋がるような場にしたい」「いつまでも活気のある未来に続く場になりたい」ということだった。この博物館の企画の数々に、そんな思いが存分に活かされていると感じた。

ただ陳列されたものを眺める場所ではなく、リアルな自然と生態を体感する場所。博物館のイメージが覆された取材となった。

も出てきてます。「子どもたちの成長を嬉しそうに語る佐野さんから、兄貴分として慕われる姿が目につく。



公益社団法人 観音崎自然博物館

神奈川県横須賀市鴨居 4-1120
Tel&Fax 046-841-1533

開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日：月曜日（祝祭日の場合翌日）

年末～1月1日 7月8月は無休

入館料：大人500円

小中学生300円

幼児100円

※イベントは別途

※会員制度あり



博物館 HP >>